

ここに ある 絵本

『じごくのそうべえ』

曲芸の最中に不幸にも死んでしまった軽業師のそうべえが、地獄の底から這い上がってくるという物語。できれば考えたくない死の世界をユーモラスに描き、笑いを誘う。

地獄の旅路は4人連れ。歯医者、鬼の歯を抜いて食いちぎられるのを逃れ、医師は鬼の内臓を知り尽くし胃袋から脱出し、山伏はまじないで釜の熱湯を温泉に変え、軽業師のそうべえは地獄の針の山を歩き抜けた。そして四人は地獄から追い出され生き返るっていうムチャクチャな話。

「赤、青、ピンク、黄色といえば正義の味方」なんて、オブラートで包んだお子ちゃまの世界。カラフルの元祖は昔から鬼それがホント。忘れてもらっちゃー困ります。

「水洗トイレの普及で糞尿地獄がカラカラで、オマエのオナラの方が臭いだらう」、なんて臭いモノにフタをしたまま育つてしまう今どきの子どもにピリツとリアルを突きつける。

すなわち、人間が生きて食べていくっていうこと。そして必ず死んでいくっていうこと。それは悲しいだけじゃない、臭い汚い現実がおもしろいんだって聞こえてくる。



『じごくのそうべえ』(童心社)
たじま ゆきひ 作

子どもたちに何を伝えるべきなのか。
大人は何をしってるつもりにしてしまっているのか。
ナゾナゾナーゾナーゾ？ 思い切ってお子さまと読んでみてください。

(編集委員)



編集後記

日々の生活の中で、やりたいことをやっていますか？正直なところ、一年間、「ぎふどうぼう」は「やりたいことをやるう」と歩んでまいりました。ワタシは何が本当はしたいのか？ワタシは一体何者なのか？白紙の「ぎふどうぼう」をてがかりに、ハッキリさせようというのがテーマでした。結果、力みすぎたページもあり、最後に手を抜いたところもあり、まさに我が人生そのもの。しかし、「ぎふどうぼう」を紡ぐことで、良くも悪くも道しるべが印されたということでしょう。テレビや新聞、インターネットを通じて、情報に触れば触れるほど、人間が自らを知る眼を失って迷走していく、そんな時代を迎えているような気がします。立ち止まり、考え、一つの方向を見定める。そういう機会を持つことを我が人生のために大切にしたいと思います。

〈表紙写真〉
どんぐり写真クラブ 太田誠

発行 岐阜教区教化委員会
真宗大谷派岐阜教務所
鈴木宏雄
〒500-18054
岐阜市大門町1
Tel.(058)266-1378
編集 岐阜同朋編集委員会

仏道のはじまりに

時間を費やして、
あらゆる物に豊かさをしようとする。
その豊かさの先にあるものは、
……孤独だった。
「私のため…、あなたのために…、」
…そして、私を語り、あなたを語る。
そのことに何の疑問も抱かない。
「…ために、ために、」を前提に、
思想、道徳、教育、宗教、…が、
理性によって語られていく。
意味あるものに成らなくてはと、
無意味な生き方を選別し、
自らを切り刻む…。
そのこと全体を問うていく道を、
ある青年は、こう問いかけた…。

「何のために…」
それはいろいろあるだろうけれど、
…のために生きるでは、
なんとなく生きることそのことから
ずれているようにかんじるのです。
うまく言えませんが…」

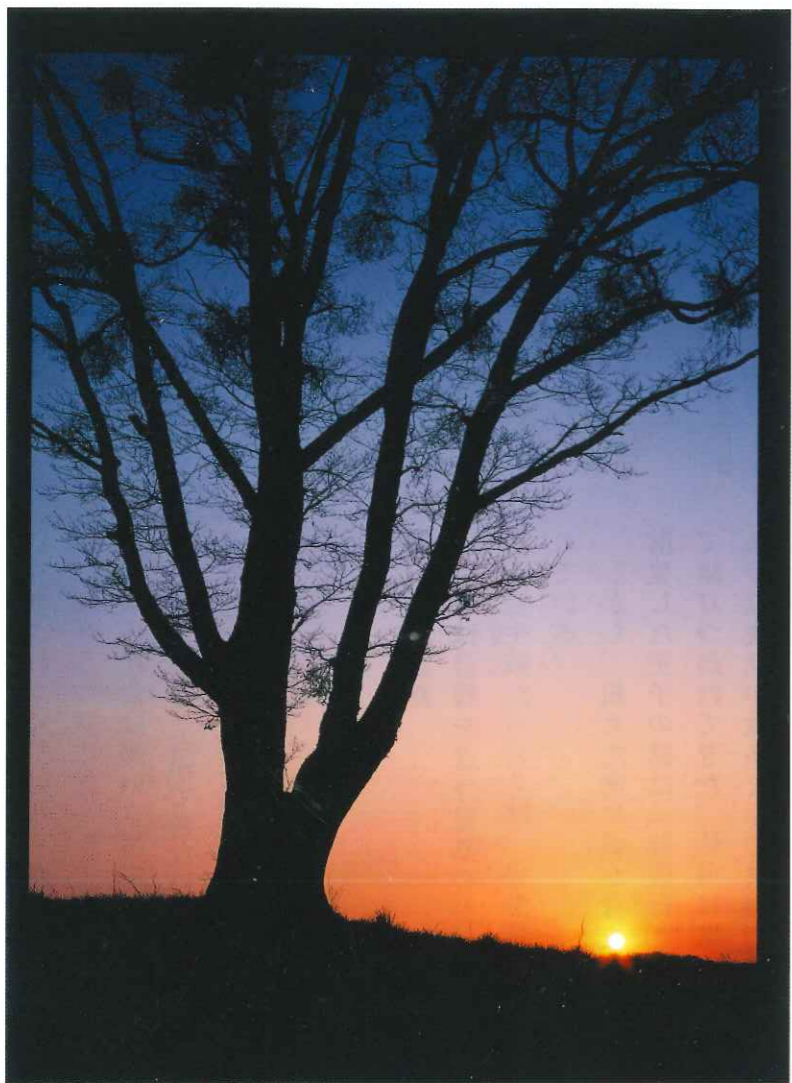
(作文「自分はいま何のために生きるのか」
川島君の問い『信國淳選集第八巻』より)

(文 森孝照)

ぎふ どうぼう

No.
91

2006.7



「問いとしての自殺と 真宗の学び」

戸次 公正

(真宗大谷派南溟寺住職)

●遺された者の声

「父がなぜ」と娘さんは悲嘆にくれていた。そして自死遺族の集いに参加するうちに「自分史」を淡々と語れるようになっていく。そんなドキユメンタリー番組に釘付けにされてしまった。

全国の自殺者は昨年、3万2552人と8年連続で3万人を越えたという。中高年が多いが、若者の数も5%以上増えている。(新聞各紙報道) そんな現状から、今期の国会に「自殺対策基本法」が議院立法として提案されている。これは自死者の遺族が運営するNPOが集めた6万人も

の署名が法案の形となったものだ。その訴え。

「自殺の問題を『弱かったから』『うつ病だったから』の理由で片づけるのではなく、その人がなぜ弱い立場に立たされなくてはならなかったのか、なぜうつ病になったのか、あるいはなぜ社会は弱い立場に立たされた人々を救うことができないのか、と考えることが重要だと思います。」(『自殺って言えなかつた』サンマーク文庫)

●自殺は罪か

仏教は自殺をどう見るのか。不殺生戒から言えば、当然禁止されている。

しかし、飢えた虎に我が身を捨身供養した王子の話は「菩薩行」として語りつがれてきた。仏典にはこのような説話が数多くふくまれている。その意味するところは何だろうか。

また、ベトナム戦争の際に、自らの身体を焼く自己犠牲を捧げること、反戦平和の意思表示をする僧たちが現われた。これは自殺行為と同じことなのか。

人には「有愛・非有愛」がある。有愛は「死にたくない」という欲。非有愛は「生きていたくない」という欲。自我への執着心だから私たちが縁が催せばいずれかに傾く。自殺はいけない、とわかっていても状況で揺れる。いつの間にか自殺願望がきざすこともある。

●親鸞の病気観

親鸞の病気観ははつきりしている。病いには身から起こるものと心から起こるものがある。

身から起こる病いの中に、身心の病いをふくめる。つまり精神病も身の病いのうちだから、どんな死にざまをしようと往生には関係ない。これはきわめて科学的な思考だ。

では心の病いとは何か。これは念仏を誹謗し弾圧し、信じられないことをさす。そんな人は天魔になり地獄に落ちる、という。(御消息集広本10)

だから真宗の学びからいえば、自殺も我が身に起こる病いが要因であって決して非難されるべきことではない。

●問いとしての自殺

ただ、なぜあの人は自殺したのか？という問いは残る。

私は二人の念仏者を忘れられない。高木顕明と笠原初二である。

高木顕明 (1864～1914)

縁あって真宗大谷派僧侶となり和歌山県新宮 浄泉寺の住職となる。日露戦争のさなかに非戦論を唱え、部落差別問題を通して親鸞の道を歩まんとした。

清沢満之は「精神主義」の名目で真宗の信仰を表現しなおした。

高木顕明は「余が社会主義」の名目で真宗の信仰と運動を表現しなおした。

大逆事件に連座。死刑判決後、無期刑になる。宗門は住職を差免し、擯斥(永久追放)に処した。秋田刑務所で自殺。50歳。

大逆事件は国家権力によって作られた一大冤罪である。その理不尽な処刑に憤ったのは徳富蘆花や石川啄木だった。

教団は高木を見殺しにただけでなく、歴史の闇の奥に埋もれさせてきた。

●生死の一大事として

では、真宗に生きる者のつとめとは何なのか。

自殺者が身をもつて示した事実を「生死の一大事」として、今はからずも生きている私たち一人ひとりが受けとめるほかはない。

それは自ら命を絶つていった人から「仏願の生起本末(本願はなぜおこされたのか)」「(聖典240頁)を聞きぬくことができるかという問いかけだ。自殺によって後に遺された者の苦悩は深い。そこには偏見や差別、自殺そのものへの迷信や誤解や思い込みがあまりにも多い。それが遺された者を圧倒する。しかし、そこから自殺をなくすために自分たちに何ができるのか、という真摯な取り組みもなされている。

私たちも、もつとまわりの人たちみんな「人はどんな思いでみずから命を絶つてしまうのか」「なぜ人は自殺するのか」「自殺を防ぐためにはどうすればよいのか」など自殺の問題について話し合ってみようではないか。少しでも偏見や差別を解消していくために。



<プロフィール>

1948年大阪泉大津市生まれ
大谷大学大学院修士課程修了
大阪教区第22組 南溟寺住職

○著書 『正信偈のこころ 限りなきいのちの詩』
『阿弥陀経が聞こえてくる-いのちの原風景-』
『同朋唱和正信偈・意識付』(法蔵館)
『真宗の学びとは』I・II・III (四国教区教化委員会) など

『笠原初二遺稿集 なぜ親鸞なのか 滝沢克己編』(法蔵館)

大谷専修学院に入学。78年から真宗大谷派同和推進本部に勤務。80年9月7日、京都市内の病院で自殺。34歳。彼は親鸞を尋ねて大谷派に関わり、その差別体質と閉鎖性という壁にぶつかり絶望していったのかもしれない。

高木も笠原も、彼らは死に至るまで、とてつもない苦しみを抱えつつ、彼らなりに必死になって生きていたのだと思う。それをどこまで理解しうるか。彼らの自殺に対する安易な評論だけは避けたい。



普段、何気なくお給仕しているお内仏。毎日の生活の習慣にま
でなつて、お花を替えたり、蠟
燭を点じてお勤めをしたり……。
でも、どうしてお給仕をするの
かしら？正しい作法があるのか
しら、一つ一つに意味があるの
かしら……。
ということ、お給仕について
いろいろと掘り下げてみました。

びつじ
スームイン

香・華・灯・食

香

朝晩のお勤めのとき、土香炉にお
線香を燃香(ねんこう)します。香炉
の大きさに合せて線香を折って火
を点じ、横に寝かせてください。
ご命日のお勤めのときは、火舎香
炉(かしゃこうろ)に香炭を入れて、
沈香などのお香を焼香(しょうこう)
します。お内仏の火舎香炉が小さい
場合は、お内仏用の小さい香炭が
市販されているので、それをお使い
下さい。



火舎香炉



土香炉

華

花瓶(かひん)にお花を立てます。
とげ針のある花や、蔓花(つるはな)は用いま
せん。
花瓶より小さな華瓶(けびょう)に
密(しきみ)を挿します。密がない
場合は、厚い青葉のものを代わり
に挿してください。



華瓶



花瓶

灯

本来、お仏壇を開扉(かいひ)している間ずっと灯しておくのがお灯明です。
また、ご命日のお勤めなどのときは和蠟燭(わろうそく)を点じます。ご家族のどなたか
が亡くなられて中陰(ちゆういん) (四十九日)の間は白色の蠟燭を使用しますが、それ以
外は朱色の蠟燭を基本に使用します。



お灯明



和蠟燭

食

仏器に蓮の葉の形の白飯を盛り、朝のお勤めの後お供えします。お仏供は
正午に控えます。
年忌法要やお取越(し) (報恩講)を勤めるときには、白餅を供筒(くげ)にお供
えしてください。



供筒



お仏供

仏説無量寿経に、「起立塔像 飲食沙門 懸繪然燈 散華焼香 以此回向 願生彼国」(聖典45p) (塔像を起立し、沙門に飲
食せしめ、繪(きぬ)を懸け、燈を然し、華を散じ香を焼きて、これをもって回向してかの国に生まれんと願ぜん)とあります。
香・華・灯・食は佛の四大供養具と呼ばれ、古くインドのお釈迦さま在世の時代から行われてきたことが分かります。
今、私たちが仏さまを香華灯食をもって荘厳(しょうこん)し、そのお給仕の形には、本当に古い古い歴史と人間の営みがあったことに気が
つきます。

作法が正しいとか、理屈がどうか、うちのシキタリは昔からどうか、それも大切なことではあるかもしれませんが、仏教
の歴史に連なる私となるのだ、という感激でもって毎日のお給仕にのぞんでください。(^^)

しあわせと自殺

しあわせって何だろう？

6月1日の警視庁の発表によると昨年自殺者は、8年連続で3万人を超えました。年代別では60歳以上が33.5%にも上り、動機は「経済・生活問題」(23.8%)以下を大きく引き離しています。

また、連日のように、老人自殺の記事が紙面を賑わします。

『猶予判決の4日後、

「介護殺人」の夫自殺』1/31読売

この夫婦は近所でも評判の仲のよい夫婦だったそうです。夫は、殺害した認知症の妻の弟らにあて「めんなさい」と書いた遺書を残し、住宅5階にある自室の玄関前からフェンスを乗り越えました。

『妻看病に疲れ？84歳夫婦心中』

近所で評判の「おしどり」

遺書に「迷惑かける」5/17毎日

「年を取ったらあんな夫婦になりたいと話していたのに」「もう少し早く気付いてあげられれば」と、ご近所のコメントが紹介されています。

また、法医学評論家の上野正彦氏の『自殺死体の叫び』(角川文庫)には、3年間の調査によると家族と同居の老人の自殺率が老人自殺全体の6割強を占めていたことが紹介されています。

福祉先進国として日本の福祉政策のお手本になっている北欧諸国でも施設に居住する高齢者の自殺率が高いことが、89号の『きふどうぼう』で既に紹介されました。

もう少し早く気付いてあげられれば、何が出来たんですか。しあわせって何だろう？

2006年(平成18年)5月17日(水曜日)

近所で評判の「おしどり」

妻看病に疲れ？ 84歳夫婦心中

遺書に「迷惑かける」

布団で寄り添い

自殺か自死か

住職修習の研修の時、

「自殺」は殺人で、仏教上許されないとする意見と、自殺ではなく「自死」で、死なずにはおられなかった病気だ、とする意見が対立しました。心の通った身近な人の悩み抜いた中での自殺は、「自死」としか思えないのが人情でしょう。しかし、人情を超えて仏教、真宗ではどのように理解すればいいのでしょうか。キリスト教のようにいかなる場合であっても自殺は許されない罪なのか。自殺について衆生である我々が語る必要がないのか。

真宗的な回答は

仏教では、自殺を罪悪だとか、自殺をしたものは葬式をしないとか、自殺者を出すような家庭は呪われているなどとは教えません。善悪で判断すること自体、越権的考えでしょう。仏教に生きる人は、自殺する必要のない人生を見出すに違いありません。

ということになると思いますが、あなたの心に響きますか。

真宗に関わる一人一人がもつと自分の問題として真剣に考え、深めていかなければ、先の言葉は、空虚なものにしか聞こえません。

慈悲とは、

仏・菩薩(ぼさつ)が人々をあれみ、楽しみを与え、苦しみを取り除くこと。

衆生に樂を与えるのが慈。衆生の苦を抜くのが悲。

人に楽しみを与え(慈)、他者の苦しみに同情し苦を抜こう(悲)としても衆生のレベルでは所詮無理です。慈悲とは、仏・菩薩だからできる行為です。ここが大事です。我々には智慧がありません。自分の都合でしか物事が見えません。つまり生まれてきたことに喜びを感じ、生き生きするには、仏の慈悲に出会う以外無いのではないのでしょうか。少なくとも、宗祖親鸞聖人は、「正信偈」でも分かる通り生きる喜びに出会われました。ここを手がかりにしなければ。

榊田昭裕



「床屋の次男坊」との

出遇い

五月八日から二十日までの二週間、ご縁をいただき本山中央声明講習会に一回生として参加させていただきました。全国から声明のエキスパート(本山准堂衆)を目指す若手の精鋭(多くは二十代)が集まり、共に研鑽(?)してまいりました。

しかし、私の結果(成績)は惨憺たるものでした。ほとんどの方々は事前に地元の先生についてすでに学習を深め、私とはスタートラインが違っていました。自分の情けなき・実力のなきを隠らずも露呈する二週間でした。私とは親子ほど歳の違う人たちのフレッシュな出遇いを通して、また、彼らと共に声明講習を受講できたということに深く感謝しております。

そんな中、斜め後ろの席に座ったK君はすばらしい美声で成績もピカイチ。歳は二十一歳。話を聞くと寺族ではないことが判明。「ぼくは床屋の次男坊です。小さい頃近所の若い住職さんに憧れてお寺の坊さんになることを決意。九歳で得度させてもらい、准堂さんでもあったその住職さんに付いて声明を習ってきました。今は大谷大学の四回生です。」とのこと。お寺の長男として生まれ、ぬるま湯の中で育ってきた私とは「志」が違いました。

また、右隣のS君(二十八歳)は熊本から飛行機で参加。門徒数は少ないけれど毎週二回、地域ごとに同朋会・学習会を行っているとのこと。いろんな人と知り合いになり楽しい話をさせていただきました。どの子(方々)も目を輝かせながら話をしてくれました。また来年も落第(私は可能性大)しなかつたら来よう」と約束してきました。慌しく、ともすれば単調な日々

『気づく』



第五組 正壽寺 尾畑英和

今より三十年程前、昭和四十九年に私は縁あって、滋賀県彦根市の料理旅館より岐阜県土岐市の極善寺に嫁いで来ました。父や母は商人で、多くの仲居さんをかかえていましたから、人間関係のむつかしさを、十二分に知っていましたので、私を寺に嫁がすということには反対でした。私も含め一般から見ると、寺とは当然親と同居、門徒さんとのつき合い、また寺に対するイメージも暗く、閉鎖的という感じをもっていました

から、遠く違う世界へ娘を出す親心であったと思います。最初の十年位は、若かつたし、子育てという名目で寺の行事は坊守である母にまかせきり。次の十年位は、子育てと世間にかまけて、食べたり旅行したりして、寺のことは少しだけ手伝っていました。が、平成七年一月に義母が突然亡くなり、自分の思いに関係なく、寺の行事、坊守の仕事、義父のこと、畑作業まで、すべて受け取ることになりました。その事によって、坊守会にも参加するようになり、法話を聞く機会にも恵まれると、妻となり、母となり、坊守としてきたかのように思っていた人生が、色々な人と与えられ、ご心配をかけた育てられてきたのだとわかりました。

ここ十年程の間に、長女が嫁ぎ、孫が生まれ、長男の所に嫁が来て、だんだん年老いていく義父と毎日接し、実家の母は車イスの生活になり、父は、曾孫の顔を見

第十二組 極善寺 最上庸子